

「平和の俳句 7」

2015年07月01日

「東京新聞」が今年の元旦からスタートした「平和の俳句」には3万通の応募があったそうだ。人々は皆、平和を求めている。6月に掲載された中から紹介したい。

子どもの句は単純で、気持ちがそのまま伝わってくる。「へいわとはおはながげんきにさいている 萩原晶子 4歳」<金子兜太 萩原さんは幼稚園児、花咲く道を毎日元気に通っている。ことに満開の桜の花は元気。これが平和と言うものさ。> 花が好きなのは幼児と老人ではないか。私はこの頃、花が目に入るようになった。「食べ物がなくなった時分け合おう 岡井葵 8歳」<いとうせいこう 食べ物を奪いあうことから戦争が始まるのだから、このシェアの姿勢をアピールすることこそが戦争の抑止力なのだ。子供からの提案。> 格差が戦争とテロを生み出す。格差が大きくなっている今、戦争の準備ではないかと思ってしまう。 岡井君の提案に耳を傾けたい。大人も子どもと同じように率直に詠むことができる。「平和とはかみしめて御飯を食べること 宮本武子 76歳」<金子兜太 ゆっくりご飯をかみしめて食べているとき、ああこれが平和だからこんなに旨いんだ、ありがたいなあとおもう。この日常。> 旧満州から引き揚げて、子どもの頃はひもじかったという思い出ばかりである。お蔭で、私は早食いになった。「へいわとはありのままにてわらうこと 野村さやか 42歳」<金子兜太 作り笑いは不和の元。「へいわ」と「わらう」と「わ」が調和。> <いとうせいこう シンプルな言葉で言いあらわす真実。その笑いを四季の日々に。> この頃、テレビでの若者たちの笑いについて行けず、チャンネルを切り替えるようになった。妻とはケンカと笑いの日々である。

「沖縄の声聞く耳の無き桜 下山信行 75歳」<金子兜太 軍事基地を押し付けられた沖縄の声。桜だって聞いているぞ。> 『沖縄 うりずんの雨』を観た。沖縄「慰霊の日」のテレビを観た。安倍首相への「帰れ」の怒号が印象的だった。「今歌う父が語りしシベリアの歌 青野はる子 71歳」<金子兜太 作者の父親のシベリア抑留は長かった。「誰か故郷を想わざる」を大の男が涙とともに歌っていたという。忘れるなシベリア。> 私も子どもの頃、兄弟と一緒に、霧島昇の「誰か故郷を想わざる」をよく歌った。「翼賛の風になびかぬ草でいる 並木孝信 80歳」<いとうせいこう かつての戦争で何が起きたかを、私たちは今ひしひしとを感じる。大声を上げる者たちに自分から身をあずけ、協力する無名者にならじ。> 並木氏は翼賛勢力に飲み込まれず、一人になっても反骨の民草を通し抜くと詠っている。戦争に動員されるのは若者たちである。彼らの声に期待したい。

掲載された句の中から、著名人が一句ずつ選んで、コメントを寄せている。作家の五木寛之氏の選、「3月10日南無十万の火の柱 古谷治 91歳」もちろん、東京大空襲を詠んだ句である。五木氏は「戦争を引き起こしてしまったという無念と反省の気持ちが伝わってきます。ここに惹かれました」とコメントしている。ノーベル賞を受賞した物理学者の益川敏英氏の選、「聖戦などあるはずがなくて枯蓮 大井公夫 68歳」「政治家も戦争体験のない人が主流になり、空理空論で議論をしている。だから『憲法九条があっても戦争ができる』なんてへんてこなことを言い出す」と言っている。瀬戸内寂聴氏も「良い戦争は無い。すべて人殺しだ」と言っている。落語家の立川志の輔氏の選、「平和とは坂に置かれたガラス玉 伊藤美津子 51歳」「この句は、この平和が決して坂の上から転がり落ちることのないよう、憲法とともに守っていくことの大切さをあらためて目覚めさせてくれます」とコメントしている。俳句に込めた平和への願いが現実となるようにと願う。